



目次

Page

| | |
|---------------------------------------|---|
| 祝 ILSI Japan 機関誌『イルシー』100号発行 | 1 |
| 第2回 ISO/TC34/SC16 総会 | 2 |
| ILSI Japanワークショップ「GMO検知技術の動向」 | 2 |
| 「東アジアの食品等の規格基準の調査と結果の共有化」 | 3 |
| 「水分補給のサイエンス……これからの水分補給を考える」 | 3 |
| 新理事就任ご挨拶 | 4 |
| ILSI Japan CHP の活動 ～ Project PAN ～ | 5 |
| ILSI総会開催 | 6 |
| 第4回 国際お茶会議参加 | 6 |
| 第6回 栄養とエイジング開催予定 | 6 |
| 編集後記 | 6 |

祝 ILSI Japan 機関誌『イルシー』100号発行 本年2月

ILSI Japan 機関誌『イルシー』100号が本年2月に発行された。第1号が昭和56年11月であるから足かけ30年での到達である。第1号『食品とライフサイエンス ILSI 等活動検討委員会会誌 No.1』には当時 ILSI Japan 初代会長であった小原哲次郎氏の報告、現理事長木村修一氏の報告等が掲載された。その後22号からは『食品とライフサイエンス』に名称が変更され、31号からは『ILSI イルシー』に、70号(2002年)からは現在の名称となった。(写真掲載)

昨年9月18日、および9月29日に当時から現在までの関係者をお招きして座談会を開催した。以下『イルシー』100号から要旨掲載。

(詳細は『イルシー』100号をご覧ください。)



写真：右から機関誌創刊から100号までの歩み

【内容への要望】

- ・全般的に今の『イルシー』誌の内容は良いが、巻頭言のほかにも何か ILSI としての主張が言えるようなコラムがあってもいいのではないか。国際会議の内容紹介にとどまらず、それに対して ILSI Japan としてどういう意見をもっているのか、会議に出席した際に提言を反映できるように生かしていただければいい。
- ・シリーズとして連載する記事があってもいい。
- ・会員からの報告がやや少ないので会員企業に執筆してもらった記事をもっとあってもいい。他の協会の機関誌にも、以前、会員企業の研究所を訪問するような記事があった。
- ・今までの記事をデータベース化して何かの時に検索できるといい。
- ・ILSI Japan の翻訳専門誌『栄養学レビュー』は年4回発行しているが、原本の“Nutrition Reviews”誌の Science & Policy Making は、他のジャーナルが扱わない極めてユニークなコーナーで、日本語版の『栄養学レビュー』誌に載せるのはいささかという場合でも、『イルシー』誌なら載せうるし、イギリスの出版元が翻訳掲載を OK してくれたら掲載するのは非常に面白い(現在トライ中)。

【機関誌発行の目的とその中身の変遷】

ILSI というのは、ポリシー・メイキングにおけるサイエンスの支援部隊であり、産・官・学連携で「食品と健康あるいは安全性に関する内外の情報を科学的立場から検討

する」ことを目的として設立された。時の経過とともに機関誌の内容、バランスは変わりつつ本日に至っている。『イルシー』誌は科学的な読み物としてもしっかりしたものにしたというところもあるが、会報という性質もあるので、そのバランスをどうとるかというのが常に難しい。

【更なる啓蒙と広報】

現在は約600部を、会員企業、関連研究所、学界、行政機関、一部図書館に送付している。会員企業の場合、評議員だけに送付している現状だと、社内外に回してくれる方と、なかなかそうもいかない方もおり、もう一度、配布先、回覧ルートの見直しが急務である。部会員にも直送すれば、少しそこから広がっていくのではないかと。

『イルシー』誌の要旨は、科学技術振興機構(JST)や医学中央雑誌刊行会のデータベースで抄録検索できるようになっている。国会図書館にも収蔵されている。

【祝 記念誌 100号発行】

最後に ILSI 活動に携わった先輩の言葉から。

「ILSI の他の支部では、このような機関誌は出していない。機関誌が100号も続くというのは、外部でもそれなりに受け入れられているからだと思う。100号を迎えて、相当の自信を持って、日本の政権がどのような方向性になろうとも、食品に対する制度の合理性・国際性の観点につき、消費者庁も巻き込んで早急にすすめる体制を構築してもらいたいものである、ということを強調して呼びかけたらどうでしょうか」

GMOニュース 2件

第2回 ISO/TC34/SC16 総会 東京・品川で開催、2010年2月9日~11日

2008年5月にISO/TC34（国際標準化機構、食品専門委員会）の分科委員会の一つとして、バイオマーカーの検知技術の国際標準化を進めるISO/TC34/SC16（分子生物指標の分析に係る横断的手法）が設立されたが、第2回ISO/TC34/SC16総会が、2010年2月9日~11日に東京・品川で開催された。本会合へは、Pメンバー（Participating member；TCまたはSC内での票決のために正式に提出されるすべての案件に対する投票の責務を負って、業務に積極的に参加し、また会議に貢献するメンバーのこと）15か国のうち8か国の参加があり、出席者はアメリカ7名、イギリス2名、ドイツ4名、JRC（EC共同研究センター）1名、フランス3名、中国2名、インド2名、タイ7名、日本7名、ISO中央事務局1名、計36名であった。また、農林水産省、ILSI Japan、

JMAC（特定非営利活動法人バイオチップコンソーシアム）がオブザーバーとして出席した。なお、独立行政法人農林水産消費安全技術センター（FAMIC）国際課長久田方彦氏がISO/TC34国内審議団体事務局として出席し、日本国内での会議開催をサポートした。SC16の幹事国はアメリカであり、議長はMichael Sussman、幹事はRichard Cantrillが務めた。



遺伝子組換え作物

遺伝子組換え作物は世界的に急速に普及してきており、2008年には世界25か国、1億2500万haで栽培されている。トウモロコシ、ダイズ、ナタネの主要生産国では、その生産量の大半が遺伝子組換え作物になっている。また、農産物の貿易拡大により遺伝子組換え作物や様々な作物品種、作物に潜在的に存在する病原体が、容易に世界中を往来できる状況になっている。一方、遺伝子組換え作物等のバイオマーカー検知技術の発展は目覚ましいものがあり、食品分野においては農産物の品質管理等に利用され、それらの技術は重要性を増している。

ILSI Japan ワークショップ「GMO 検知技術の国際動向」開催 2010年2月12日

ILSI Japanでは、政府機関をはじめとした国内関係者の方々にGMO検知技術開発の国際動向および国際標準化の現状についての理解を深めていただくことを目的として、前述のISO TC34/SC16国際会議出席者を講師としたポストワークショップ「GMO 検知技術の国際動向」を、本会議直後の2010年2月12日に開催した。当日は70名の募集定員に対し、80名以上の参加があった。

ワークショップ概要

ワークショップタイトル：国際会議ポストワークショップ「GMO 検知技術の国際動向」

日時：平成22年2月12日(金)9:00~19:00

場所：グランパーク プラザ棟3階 会議室302+303（東京都港区芝浦3-4-1）

主催：特定非営利活動法人 国際生命科学研究機構（ILSI Japan）

協賛：ILSI-IFBic（International Food Biotechnology Committee）、CropLife International

後援：農林水産省、独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所、独立行政法人農林水産消費安全技術センター（FAMIC）

プログラム

| 第1部 国内の動向〈座長：布藤聡 ILSI Japan / (株)ファスマック〉 | | 第2部 海外の動向〈座長：布藤聡、橘田和美 独立行政法人 食品総合研究所〉 | |
|--|--|---------------------------------------|---|
| 9:00-9:10 | 開会のあいさつ 木村修一（国際生命科学研究機構 理事長） | 12:30-13:20 | 「GMO 検知におけるサンプリングと国際標準化」 Dr. Ray Shillito（米国・ILSI/Bayer Crop Science） |
| 9:10-9:55 | 「FAMICにおけるGMOモニタリングの現状と課題」 森田正晶（独立行政法人 農林水産消費安全技術センター本部 表示監視部 鑑定課 主任調査官） | 13:20-14:10 | 「米国におけるGMO検査の状況～日本、EU向け輸出前検査」 Dr. Frank Spiegelhalter（米国・Eurofins GeneScan Inc.） |
| 9:55-10:40 | 「食品総合研究所におけるGMO検知技術開発」 橘田和美（独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 食品総合研究所 食品分析研究領域 GMO検知解析ユニット長） | 14:10-14:30 | 休憩 |
| 10:40-11:25 | 「国立医薬品食品衛生研究所におけるGMO検知技術開発」 穂山浩（国立医薬品食品衛生研究所 代謝生化学部 第2室長） | 14:30-15:20 | 「中国におけるGMO検知技術の開発状況およびGMO検知法データベース（GMDD）」 Prof. Dr. Dabing Zhang（中国・上海交通大学） |
| 11:25-12:30 | 昼食休憩 | 15:20-16:10 | 「種子のGMO検査」 Dr. Beni Kaufman（米国・BioDiagnostics Inc.） |
| | | 16:10-17:00 | 「米国農務省におけるGMO検知技術への対応」 Dr. Ron Jenkins（米国・USDA-GIPSA） |

（詳細は『イルシー』誌101号をご覧ください。）

ILSI アジアブランチの仲間との連携

「東アジアの食品等の規格基準の調査と結果の共有化」ワークショップ開催

ILSI Japan は昨年6月、平成21年度食品産業競争力強化対策事業関係補助金、農林水産省総合食糧局関係事業、29件の事業公募のうち、東アジア食品産業海外展開支援事業に課題として「東アジアの食品等の規格基準、分析法の調査と結果の共有化」を提案し、調査受託を得た。

ILSI Japan としては、東アジア地区の ILSI の仲間たちと連携した取り組み課題として格好のテーマであり、本年度より活動を再開した国際協力委員会を中心に、韓国・中国・東南アジア各地区の ILSI 拠点と協働調査チームを編成、精力的に取り組んできた。その成果の共有化活動の一部として、ワークショップを平成22年3月29日に東京で開催、同年3月末には最終報告書を農林水産省に提出した。

最終報告書、ワークショップの詳細は ILSI Japan ホームページの国際協力委員会*1に全文掲載しているのは是非、参照されたい。

*1 <http://www.ilsijapan.org/ILSIJapan/COM/Com-W.html>

〈ワークショップ開催〉

170名近い参加者で盛り上がる会場

ILSI 東アジア地区からの7名を含め、総勢170名の参加を得た。

調査の主対象は各国の個別食品規格 (Commodity Standard) であり、どのような品目がどのように規格化されているか、それらと一般的規格 (添加物、残留農薬、衛生等々の各品目共通の規格基準) との関係を含む、個別食品規格を中心とした「食品法規制の枠組み」である。個別食品事例としてインスタント麺、炭酸飲料、調理冷凍食品について各国の規格の比較を試みている。



農林水産省
総合食料局
齋藤勇一課長
補佐からの
ご挨拶



予定を超えて170名に達した会場

日本と似た食品法体系の韓国

韓国からは ILSI Korea の主要メンバー3名が勢揃いし、事務局長の Myeong-Ae 氏からプレゼンテーションがあった。食品法体系が日本と類似している部分も多くある。

枠組みが複雑で構築途上の中国

今回は中国の、MARS FOOD (China) の Li Yu 氏からプレゼンテーションがあった。現在の中国は食品行政枠組みの再構築中であり、全体を俯瞰するのは難しい局面である。

アセアンへの展開を志向する東南アジア地区

食糧輸入国のシンガポール、輸出農業国のマレーシア、極東に位置するフィリピンとそれぞれ特有の背景を持つ国々の食品行政の枠組みが紹介された。アセアン諸国の調和という課題に対する ILSI Southeast Asia Region の積極的な取り組み姿勢がうかがえた。



東アジアの仲間による総合討議

東アジア食品産業海外展開支援事業への第2期取り組み

このワークショップと最終報告書をもってこの事業は終了したが、ILSI Japan として継続して平成22年度分にも課題応募し、6月に承認された。我々としては第2期として、第1期に取り組みなかった、タイ、インドネシア、ベトナムへの調査拡大、現地でのワークショップ開催といった課題に取り組む予定である。東アジアの ILSI の仲間たちとの連携を深めつつ進めていきたい。



名刺交換会でのほっと一息の
スピーカー各氏

(ILSI Japan 岩田修二)

(詳細は『イルシー』誌102号をご覧ください。)

「水分補給のサイエンス ~これからの水分補給を考える~」

主催 ILSI Japan, ILSI North America

去る6月17日(木)、港区白金台の八芳園で講演会が開かれた。ILSI Japan では世界各国と連携し、研究・調査・啓発活動を進めているが、今回は ILSI North America と共催で、現在における水分補給の最新研究結果と水分補給の今後についてパネルディスカッションを実施した。演目と演者は、「日常における水分補給」マキシム・ピュイックス氏 (ザ・コカ・コーラカンパニー)、「スポーツパフォーマンスにおける水分補給」ミンディ・ミラード・スタッフォード氏 (ジョージア工科大学運動生理学教授)、「水分補給の生理学メカニズムと熱中症の予防」鷹股亮氏 (奈良女子大学生生活環境学部教授)、「水分補給と健康：将来への展望」ローレント・レベレゴ氏 (ザ・ダノンカンパニー)。

約130名の聴衆の参加があり活発な討論が行われた。中でもスポーツを趣味や競技として楽しむ最近の傾向を反映してスポーツをする際の水分補給の実際について具体的な質疑応答や、日常生活における水分補給のあるべき姿が紹介された。



ILSI Japan 新理事就任ご挨拶

2月22日の総会で選出された5人の新しい理事の方々



花王株式会社 安川拓次
執行役員 事業グループ長

会社の研究部門在籍時に本機構の運営委員会、理事会を経験させて頂き、04年事業部門異動後に離任、今回6年ぶりの復帰となりました。復帰の動機は、食品をめぐる最近の大きな動きに対して、産学メンバーから成るユニークな本機構の重要性を再認識したことにあります。私の関心は特に予防医療に視点を置いた食の機能開発および付随する食の安全性とコミュニケーションにあります。

壮年期を対象とした特定健診制度導入により、世界で初めて予防医学の実証フィールドを国家規模で構築することが可能になりました。予防事業の普及に伴って国民の健康意識が高まると、医療だけでなく、日常生活において一人ひとりが健康管理を継続するニーズが生まれ、それを支援するサービスや予防機能のある食品に代表される健康ソリューションが必要となります。

食の機能開発および付随する食の安全性とコミュニケーションの推進には、産学官コンソーシアムによる共通ルール（土俵）作りとその土俵上での企業、研究者による創造的な研究開発競争を柱とした国レベルの事業フレーム作りが重要です。本機構がこの推進にどこまでの役割を果たせるのか、期待と一理事としての責任への思いを膨らませています。



キッコーマン株式会社 松山 旭
執行役員 研究開発本部長

ILSIの活動に、これまで直接参加させていただいたことがないにも関わらず、ILSI Japanの理事、ILSI本部のTrusteeを仰せつかり、その責任を痛感しております。食品の安全性、機能に関しまして、世界中のどこかで、毎日のように話題が出ております。本機構は、その創立以来、グローバルな組織として、これらの確保に向けて、産学メンバーにより重要な貢献を担ってきております。

食のグローバル化、言い換ええますと食文化の交流は、今後一層進んで行きます。食の安全性の国際基準作り、また、生活に必要とされる食の機能の提供等に多大なる貢献をしてきました本機構への期待には大きなものがあり、一理事として、企業人としての枠を取り払い、一層推進してゆく所存でございます。積極的な交流を国内、グローバルにおいて図り、研究者によるクリエイティブな研究開発活動を生かした事業フレーム作りを少しでも調整できるよう努力をいたしますのでよろしく御支援のほどをお願いいたします。



サントリーホールディングス株式会社 辻村英雄
常務執行役員 R&D 企画部長

安心・安全の確保、健康長寿の実現そして環境保全、これらは人類の目的でもあり企業活動のベースをなすものです。特に人の口に入るものを取り扱っている食品企業においては、安心・安全の確保は絶対のものであり、また環境に優しくない企業は存在する資格がないのも事実。このような状況の中、ILSIが果たすべき役割は益々重要性を帯びていると考えています。ILSIの存在意義、活動内容を見直し論議することで、活動の活性化を図っていききたいと思っています。よろしく申し上げます。



ニチレイフーズ 益田和明
常務取締役 品質保証部管轄

この度ILSI Japanの理事を仰せつかりました益田と申します。

ここ数年、食の安全・安心を揺さぶる事件が多発し、冷凍食品だけではなく、「食」そのものに対する不安・不信が高まっています。生活者の皆様の「食」に対する信頼回復や、食糧資源の確保と安定供給、環境負荷の低減など、私たち食品メーカーが解決しなければならない重要な課題をいくつも抱えています。これらの課題に対して、一企業だけではなく、ILSI Japanを通じて様々な食品企業の英知を集めることにより、貢献できることは多いと思います。更にILSI Japanの特徴である信頼できる科学的な知見を元に課題を解明することにより、「食の安全・安心」を守り、未来へと受け継いで行きたいと考えております。

私も微力ながら、これまで得た知識と経験を活かし、ILSI Japanの目的である「日本人並びに世界の人の栄養と健康の増進、食の安全の確保、環境の改善」のために尽力したいと考えております。ぜひ皆様方のご支援、ご指導をよろしくお願い申し上げます。



森永乳業株式会社 高瀬光徳
常務執行役員 栄養科学研究所長

森永乳業では、乳幼児用食品の研究開発部門で、主として育児用ミルクの開発に携わってきました。育児用ミルクの改良のために、ラクトフェリンなどの母乳成分、腸内菌叢やオリゴ糖、ミルクアレルギーなどの研究にも関わってまいりました。この間、乳児用調製乳のコーデックス国際規格の改定がなされましたが、(財)日本国際酪農連盟の一員として、日本政府のテクニカルアドバイザーの立場でコーデックスの会議にも参加させて頂き、国際会議でILSI等のNPOが積極的に参画し影響力を発揮していることを認識致しました。

わが国においては、食を取り巻く環境は変化し、多くの問題が発生しております。生活習慣病の増加、小児肥満、妊婦における痩せと肥満、食物アレルギー、BSEや口蹄疫の発生、食の安全を脅かす様々な事件など、枚挙にいとまがありません。ILSI Japanは、人々の栄養と健康の増進、食の安全の確保、環境の改善を実現するために、科学的・国際的な研究を推進することを目的に設立された機関であり、上述のような問題や課題についての正確な情報を国民に伝え、解決の方向性を示すことが責務と考えます。微力では御座いますが、ILSI Japanの活動に貢献できるよう努力致しますので、宜しくお願い申し上げます。

IJSL Japan CHP の活動 ~ Project PAN ~

Project PAN (Physical Activity and Nutrition) では、働きざかりの人々の生活習慣病を予防するプログラム LiSM 10![®] (リズムテン) と、高齢期にも QOL を維持し、寝たきりを防いで健康に過ごすためのプログラム TAKE 10![®] (テイクテン) を開発した。双方とも、大学教授らの専門家チームによる介入試験を経て、その効果は科学的に証明されている。

LiSM 10![®] (リズムテン) プログラム

LiSM 10![®] (リズムテン) プログラムは、職域における生活習慣病を予防し、医療費を削減することを目的として、2001 年から開発が始まり、これまでに早稲田大学の荒尾孝先生を中心とした研究チームで 3 回の介入試験を経て、多くの改良を重ねてきた。これらの結果とプログラムの有効性については、学術論文としても発表している。

2009 年 4 月より、厚生労働省は、メタボリックシンドロームに焦点をあてた新しい健診制度「特定健診・特定保健指導」をスタートした。リズムテンはこの特定保健指導における理想的なプログラム構成となっている。



〈内容〉

検診結果と事前調査（アンケート）のデータに基づいた運動と栄養の両面からの定期的な個別カウンセリングを柱に、職域・家庭における環境支

援プログラムを組み合わせた構成となっている。個別カウンセリングでは、行動科学理論に基づいた行動変容を促す技法を用いて、対象者が目標を自己決定し、その目標を達成するための行動を持続できるように支援をする。また、日々の行動目標を自己管理できるように、セルフモニタリングシート（行動チェックシート）を準備した。リズムテンでは、このカウンセリング実施期間を対象者の自己管理能力を向上させる研修期間と位置づけており、プログラム終了後も自己管理による長期的な生活習慣病予防効果が期待できる。

〈普及〉

株式会社ニチレイフーズは、昨年、LiSM 10![®] (リズムテン) プログラムを事業化し、システムの整備を行った。現在、自社の健康保険組合でリズムテンを採用しているほか、他社の生活習慣病予防対策として受託するなど、徐々に広がりを見せている。IJSL Japan CHP では、今年度中にカウンセラー研修をマニュアル化し、普及活動を進めていく。

TAKE 10![®] (テイクテン) プログラム

TAKE 10![®] (テイクテン) プログラムは、高齢者の方々の“元気で長生き”を支援し、介護予防および老人医療費の削減を目的としたプログラムである。高齢者を要介護にしないための運動と栄養を組み合わせたプログラムであることが大きな特徴である。2001 年から開発を始め、東京都老人研究所との共同研究で、秋田県大仙市（南外地区）で

1400 名を対象とした大規模介入研究を実施し、その効果は科学的にも検証されている。

介護予防プログラムといえば、運動に関する転倒予防プログラムがいまなお主流であるが、高齢期における栄養状態は、健康寿命を左右する大きな因子である。

〈内容〉

PAN (運動と栄養) のコンセプトを具体化し、イラストを用いてわかりやすく説明したテキスト (冊子) を発行している。これには、高齢者が日々の習慣として受け入れやすいように「簡単なストレッチと筋力トレーニング」を紹介し、また食事に関しては、「食品摂取の多様性得点」をわかりやすく解説し、習慣化のツールとして考案した記録シートやカレンダーを掲載している (10 品目記録シートは、2010 年 4 月 28 日放送の NHK「ためしてガッテン」でも紹介された)。その他、口腔ケアや食品の表示に関する情報も盛り込んだ。また、高齢者が自宅で一人でもトレーニングできるように、体操を解説した DVD (基礎編、応用編) も製作した。他に、補助教材として「テイクテンのかんたんごはん」(2 冊組) を発行し、面倒になりがちな調理を楽しむ工夫を提案している。



〈普及〉

5 年前より、墨田区委託事業として「すみだテイクテン」の初心者教室、フォローアップ教室を 6 会場で実施 (年間 84 回)。今年度も 5 月から始まっている。健康意識の向上、食習慣、運動習慣の改善、筋力の維持などに効果が現れている。ここでは CHP スタッフが直接指導するので、普及のための実施具体例として、各地からの見学希望にも対応している。

また、介護予防プログラムとしてテイクテンを誰もが活用できるように、指導者用マニュアルを作成し、このマニュアルを活用した普及活動も行っている。例えば、島根県津和野町、益田市の各シルバー人材センターからの受託で、「介護予防リーダー養成講習」を開催し、TAKE10![®] プログラムを地域で普及する人材を育成。昨年度からそれぞれ「つわのテイクテン」「ますだテイクテン」として地域に根ざした事業を展開している。今年度からは、山口県岩国市錦町でも人材育成を開始する。



〈通信教育の推進〉

一般高齢者への普及の裾野を広げるため、札幌医科大学との共同研究で、冬季の外出困難地域や過疎地域などの教室型介護予防事業が難しい地域の高齢者でも TAKE 10![®] (テイクテン) プログラムを活用できることを検証するため、通信教育モデルの開発を進めている。今年度は札幌市・近郊地域での介入研究を実施する。



国際生命科学研究機構 (ILSI Japan) 総会開催

会員数減少に警鐘 (監査報告) : 活性化委員会発足

国際生命科学研究機構 (ILSI Japan) 平成 22 年度通常総会が 2 月 22 日(月) 10 時から、昭和女子大学 大会議室において開催された。正会員総数 74 名の内、出席正会員 25 名、書面表決正会員 21 名、合計 46 名が出席して大会は成立した。第 1 号議案平成 21 年度事業報告書案、第 2 号議案平成 22 年度事業計画書案、第 3 号議案平成 21 年度決算報告書案、第 4 号議案平成 22 年度収支予算書案が承認された。

特に第 3 号議案平成 21 年度決算報告書案においては、町田千恵子監事が監査報告を行い承認されたものの、町田監事の方から、「ILSI Japan の収入に対する支出超過が数年続いている今後 ILSI Japan の活動の持続可能性に大きな懸念を感じている。再活性化のための対策を早急に講じるべきだ」という旨の指摘があった。それに基づき「活性化委員会」の設立が決定した。今年度中には何らかの報告が出

される予定。(Newsletter 5 号で結果報告予定)

また報告事項として、濱野事務局長より、平成 21 年度の定款の変更に伴い、2 月 16 日に開催された理事会で下記の役員が選出されたことが報告された。

(敬称略) **理事** (再任) 岩元 睦夫、上野川修一、
木村 修一、桑田 有、
小林 修平、坂田 隆、
戸上 貴司、西山 徹、
福島 昭治
(新任) 高瀬 光徳、辻村 英雄、
益田 和明、松山 旭、
安川 拓次
監事 (再任) 町田千恵子
(新任) 青山 敏明

第4回 国際O-CHA学術会議へのILSI Japanとしての参加

ILSI セッション: 10 月 27 日、16 時から 18 時 9F910 会議室
セッションタイトル案: 世界のお茶と ILSI Japan の活動

(Tea of the World and Activity of the ILSI Japan)

内容案 1: ILSI Japan の国際貢献活動・共同研究について

中西由紀子氏

2: ILSI Japan 茶成分データベースの紹介 大石進氏

3: 茶ビジネス関連 Tim Bond 氏先生

4: 茶サイエンス関連 Zeno Apostolides 氏

第6回 「栄養とエイジング」国際会議開催予定

ILSI Japan 設立 30 周年を記念して、来年 2011 年 9 月末東京にて開催予定。

第 1 回「栄養とエイジング」国際会議はエイジングとその科学は長寿大国日本が担うべき格好のテーマであるとして、ILSI Japan 設立 10 周年を記念をして開催した。来年は第 6 回を迎えることになる。

編集後記

「世界一になる必要があるのですか、2 番ではだめですか」『事業仕分け』が面白い。既得権益に切り込む舌鋒がさわやかで鋭い。科学技術振興の費用をどのようにとらえるか。国税を投入しているのだから、その使い道、使い方に“揺るぎ”があってはならない。しかし研究開発投資での“揺るぎ”とはいかなるものか。誰がどのように評価して、その結果に対して説明責任を持てるのだろうか。「歴史が評価する」と、いささか開き直った反論があったがこれとて格好はいいがピンとこない。

これまでの科学技術の国家予算の使い方には問題がなかったわけではない。しかし、明らかに天下りの受け皿等の経費は論外としても、グレーな部分を切り捨てることは本当に将来の有益な結果に繋がるのだろうか。花実をもたらす子根を切り落とすことにはならないか。useful と useless の境目をど

こに置くか極めて難しい問題である。useful を実生活に便利さをもたらす『技術』と定義すると、いわゆる 科学の基礎研究や社会科学の実証研究は成果が見えにくいだけに、分が悪い。useful waste と言っては言葉が適当ではないかと思うが、そういった概念を許容する力が国家の総合的な科学技術力というものではないのか。ガイドライン等第三者的な枠組みを設定することはできるが、その本質評価にはなじまない。結局は研究管理者を含む研究者個人個人の学問に対する誠実さに尽きるのではないかと思う。

企業においては useful waste な部分に開発予算を割く割合は学に比べれば少ない。それでもその企業の技術のコア部分を地道に育てる長期的視野に立った経営者の姿勢こそが物づくりの底力を支えている例は我々の周囲に多くみられる。

(岩)



特定非営利活動法人 国際生命科学研究機構 (ILSI Japan)

理事長 木村修一
編集: 編集委員長 末木一夫
編集委員 磐井征行

ILSI JAPAN

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-6-7 麹町 R・K ビル 1 階

Tel: (03) 5215-3535 Fax: (03) 5215-3537

E-mail: ilsijapan@ilsijapan.org